

早期に行う矯正治療とは？～Vol.2

歯の生え変わりを追いながら
あごの正しい発達、発育を誘導

「最近、柔食が増えた食事情から、あごがあまり発達せず歯並びの悪い子どもが増えています」と、ほりい矯正歯科クリニックの堀井和宏さん。そこで今回の歯の相談は、前回に引き続き「早期に行う矯正治療について」の第2弾。あごの正しい発達・発育を誘導する治療について、さらに詳しく聞きました。

「永久歯と乳歯が混在する時期からの矯正治療は、あごの正しい発育に関連するんですね？」

一般的に歯列不正の矯正は、審美的観点と共に、あごの正しい発育が妨げ

られることを極力予防するというのが重要な目的から、早期治療がよいとされることが多いんです。

矯正治療の中で、乳歯

列期から混合歯列期（永久歯と乳歯が混在した状態）である学童期に行う

早期治療を、咬合誘導ということがあります。永久歯のよい咬み合わせに、歯の生え変わりを追いつながら誘導を行うもので、小学校低学年ごろから行う場合もあります。

「前は子どもの受け口の早期治療についてでしたが、出っ歯の場合はどうですか？」

一般に「出っ歯」といわれる上顎前突の治療には、歯に直接つけるマルチブラケットという矯正装置が多く使われます。

ただしこれは固定式なので、できるだけ装着期間を短くしたいという考えから、永久歯が生えそ

るから装着するのが通例です。中には、永久歯が生えそるわな小学校低学年から装着することもあります。その場合もできるだけ短期間でむようにつとめます。

上あごが成長しすぎている状態よりも、下あごの成長が少ない状態が多いといわれる日本人の場合、成長期の上顎前突の治療で最も大切なのは、下顎の成長を促進させる

ことで、上顎前突を治しやすくすることです。取り外しのきく装置を使って下顎が前方へ成長しやすい状態にし、同時に上顎の成長を抑えてやることで、前後的にバランスのとれた正しいあごの発育へ誘導します。成長の過程を追いながら行うため、治療中や治療後の経過観察は比較的長

かります。写真の例は9歳の女の子。取り外しのきく装置を1年半使用して下顎の成長を促した後、経過観察の期間を設け、直接装着の矯正装置を1年間装着しました。下顎の十分な成長が得られたため、

永久歯の抜歯をせずに治療ができたケースです。受け口や出っ歯のほかに、咬合誘導が必要なケースがありますか？

前歯が乱杭の場合。また、上顎の幅が下顎より狭いことなどが原因で、そしやく（食事のために噛むこと）の際、顎の位置が著しく不安定になり、常に顎を左右どちらかに寄せて噛む癖があることから、顎の発育障害が起きる可能性の高いケースもそうですね。歯列の不正により、虫歯や歯肉炎など、歯や歯ぐきの疾患にかかる可能性の高い場合も治療を行った方がよいと考えられます。

このように、歯やあご、歯ぐきの障害が将来予想される場合や、現在、障害が起きている場合、早期に発見して誘導治療を行うことが大切です。



9歳の上顎前突の女の子の例。上が治療前、下が治療後の様子